

大人のR/Cカー講座 vol.6

ピニンファリーナの
奥山清行さん、ミニッツの
出来はいかがですか？

photographs: Takashi Shimizu

「いや、本物よりかっこいいなあ」
ミニッツの「エンツォフェラーリ」を手にしたケン・オクヤマこと奥山清行氏は、開口一番、こう言い放った。実車のデザインを手がけた、他でもない本人が、である。「塗装も質感がよく出ていますね。左右のミラーの大きさもきちんと変えて再現している。機能的なところから来た異様さ」というのかな、このミラーはフェラーリのモンテゼーモロ社長が気に入らしてね。それと彼は、フェラーリの助手席にはミニスカートの美女だろう、と言ってドア下の高さをさらに低くさせたんですよ。乗りやすくはなったんだけど(笑)」
エンツォ・フェラーリは、奥山氏にとつて思い入れの強いクルマだ。「最初から最後まで担当できたモデルでしたからね。振り返ると、常にエンジニアとのせめぎ合いでした。空力などさまざまな要求がある中で、しかしこっちゃんにも譲れ

ない部分がある。自らラジエーターの角をノギリで切ったこともあった。それくらいミリ単位の世界でギリギリの戦いの結果生まれかたちですね。ここまで実車以上に再現してもらえて本当にうれしいですよ。エンジニアにも見せてやりたいいな」
ミニッツは、実車を若干デフォルメしている。設計図からCGを使って起こせば容易に作れるものをあえて変えているのは、小さなスケールに合った美しいカタチへのこだわりがあったこそ。モデルは職人が削り出して型を作っている。もはや「たかがオモチャ」と侮ることはできない世界にある。
もう一台、近く京商から発売予定のミニッツ「フェラーリ 612 スカリエッティ」を手にして、奥山氏はこう語った。「アートセンターに移った関係で、このクルマは最後まで見届けられなかったんですよ。本当はホイー

ルをこれくらい大きくしたかったし、ボディのバランスもこんな風にしたかった。私のやりたかったことを、ほとんどしていていますね。マイナーチェンジの時はぜひ参考にしますよ、本当の話」
小さなミニッツには、実車に負けないくらいこだわりの詰まっています。奥山氏の眼は、それをしっかりと捉えたようだ。

奥山氏をうならせたミニッツレーサーMR-02シリーズの「エンツォフェラーリ」(レディセット価格1万7640円、電池別売)。ラインナップの中でも一番人気だ。近日、同じく奥山氏が携わった「フェラーリ 612 スカリエッティ」(写真左、同1万7640円)もミニッツMR-02シリーズで登場する予定。



KYOSHOミニッツシリーズの詳細は、京商株式会社のホームページ<http://www.mini-z.jp>または<http://www.kyosho.co.jp>で。

Ken Kiyoyuki Okuyama

1959年山形県生まれ。アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン卒業後、GM、ボルシェを経て、'95年にピニンファリーナへ。2001年、アートセンター・カレッジ・オブ・デザインに学部長として招聘される。'04年5月、ピニンファリーナにクリエイティブ・ディレクターとして復帰。おもな代表作に、エンツォ・フェラーリ、マセラティ・クアトロポルテなど。

